



ヘルマンヘッセ全集

9

Hermann

Hesse



ヘッセ全集第九巻

知と愛

価 三六〇円

昭和三十二年七月三十日発行
昭和四十一年八月五日八刷

訳者 高橋 健二

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(280)一一二番(代)
振替 東京 八〇八番

(乱丁・落丁のものは本社又はお買
求めの書店にてお取りかえします)

印刷・二光印刷株式会社 製本・新宿 加藤製本所

© by K. TAKAHASHI. 1957

Printed in TOKYO, JAPAN.

知

と

愛

——ナルチスとゴルトムント——

ヘルマン・ヘッセ全集 第九卷

第一章

マリアブロン修道院の入口、二重の小さい柱に支えられているアーチ型の門の前に、すぐ道にそって、一本のカスターニエンの木が立っていた。昔、ローマ巡礼者のひとりが持つて来た南国のただひとつのかたみで、幹のたくましいクリの木だった。丸い樹冠を道の上にやさしく垂れて、風の中で胸ひろびろと呼吸し、春になって、周囲のものがみなもう緑になり、修道院のクルミの木さえもう赤みがかった若葉をつけている時にも、この木はなお長いあいだ葉を出すのを待ち、夜のいちばん短いころになると、弱々しい白っぽい緑色の穂のようなふう変りな花を、茂った葉の間から出すのだった。そして警告するような息づまらずうに淡い香を放った。そして、十月になって、果実やブドウがもう取り入れられてしまうと、秋の風を受けて、黄いろく色づく樹冠からイガのある実を落した。それは毎年熟すとは限らなかった。修道院の少年たちはそれを奪い合い、南国の出身である副修道院長グレゴルは自分のへやの暖炉の火でそれを焼いた。この美しい木は異国風にやさしく修道院への入口の上にその樹冠をなびかせた。産地を異にする、敏感で寒さに弱い遠来の客であったが、正門のきやし

やな砂岩の二重の小さい柱や、窓の上部のアーチ型や、軒の飾りぶちや、柱などの石の飾りと隠微に相通じるところがあり、南方の人たちやラテン系の人たちからはいつくしまれ、土着の人たちからは異国の産として賛嘆された。

この外国産の木の下の、すでに幾世代もの修道院生が通り過ぎて行った。石板をわきの下にかゝえ、しゃべったり、笑ったり、戯れたり、争ったりしながら、季節に従って、はだしだったり、くつをはいたり、花を口にくわえたり、クルミをかんんだり、手に雪のたまを持つたりして。――絶えず新しい生徒が来た。二、三年ごとに顔が変わった。残って、見習い僧となり、修道僧となるものもあった。彼らは髪を刈られ、僧衣をまとい、なわの帯をしめ、書物を読み、少年たちを教え、年をとり、死んだ。他のものたちは、修業の年月が過ぎると、両親に迎えられて、騎士の城へ、商人の家へ、職人の家へ帰り、世間へ出て、遊んだり、生業を営んだりした。彼らもいつかまた修道院をおとずれることがあった。おとなになって、小さいむす子たちを神父のところへつれて来て、しばしば、えみながら、あふれる思いでクリの木を見あげ、また姿を消した。修道院の小房と広間の中で、丸い重々しい窓と赤い石づくりののがつしりした二重の円柱との間で、生活が営まれ、授業と研究がおこなわれ、管理と支配がつづけられた。いろいろな学芸がこゝで営まれ、世代から世代へとうけつがれ

た。宗教的なものも世俗的なものも、明るいものも暗いものも。――書物が書かれ、注釈が加えられ、体系が考え出され、古人の文献が集められ、装飾文字が描かれ、民族の信仰が保護され、また冷笑された。知識と信仰、単純さと抜け目なさ、福音書の知恵とギリシヤ人の知恵、常道のいわゆる白い魔術と、邪道のいわゆる黒い魔術、あらゆるものがこゝでは何がしか栄えた。あらゆるものを容れる余地があった。隠世とさんげの修業と同様に、社交と歓楽の生活を容れる余地もあった。そのいずれが優位を占め支配的になるかは、その時々、院長の人物や、その時々、支配的な時の流れによるのであった。時には、この修道院は悪魔調伏者や魔精精通者のために有名になり、人々におとなわれた。時には、すぐれた音楽のために、時には、治療と奇跡を行う神父のために、時には、川魚のスープや雄ジカの肝臓のバイのために、というふうに、それぞれその時々、修道院は有名になった。僧や生徒の中には、信心ぶかいのも、いゝ加減なもの、断食するもの、でっぷり太ったものもいたが、彼らの群の中にはいつも、こゝに来て生活し死んだ多くのものの間にはいつも、だれかしら孤立した特別の人物がいた。そのうちある人はみんなから愛されるか、恐れられるか、ある人は選ばれた人のように見え、ある人は、同時代の人々が忘れられてしまつてからも、なお長いあいだ語り伝えられた。

今もまたマリアブロン修道院には、ふたりの、孤立した

特別な人物がいた。ひとりには年よりで、ひとりは若かつた。多くの修道者の群れが大寝室や聖堂や教室を満たしていたが、その中に、だれ知らぬものもない、だれからも注目されていたものが、ふたりいた。年よりのほうは院長ダニエルで、若いほうは、その弟子ナルチスだった。彼はつい近ごろ見習い僧になったばかりであるが、特別な才能のゆえにすべての慣習に反して、すでに教師の勤めをさせられていた、特にギリシヤ語で。――このふたり、院長と見習い僧は、修道院の中で重きをなし、注視され、好奇心を呼び起し、賛嘆され、うらやまされると同時に、かげでそれられもした。

院長はみんなに愛されていた。敵がなかった。彼は好意と素朴と謙虚とに満ちていた。ただ修道院の学者たちだけは彼らの愛の中に多少の輕侮をまじえていた。ダニエル院長は聖者であつたかも知れないが、学者ではなかったからである。知恵と言つてよいほどの素朴さをそなえていたが、彼のラテン語はたいしたことではなく、ギリシヤ語は全然できなかった。

時として院長の素朴さを冷笑しかねなかつた少数のものは、それだけナルチスに魅せられた。この神童に、気品のあるギリシヤ語を語り、騎士ふうの、非の打ちどころのない挙措をし、静かなしみとおるような思索家のまなざしと、美しくきりつとした輪郭の細いくちびるとを持った美少年に。――すばらしくギリシヤ語のできる点で、彼は学

者たちに愛された。また非常に高貴で優美な点で、彼はほとんどすべてのものから愛された。多くのものは、彼にほれこみさえした。彼がひどく静かで自制しており、宮廷ふうの作法を身につけている点を、悪くとするものも少くなかった。

院長と見習い僧は、それぞれの持ち前で選ばれたものの運命をにない、それぞれの持ち前で支配し、それぞれの持ち前で悩んでいた。ふたりとも、修道院の他の人たちのだれに對してよりももうひとりの相手に親しみを感じ、互にひきつけられていた。しかし、ふたりは互に親しくなることも、互に熱意を持ち合うこともできなかった。院長はこの青年を、この上ない細心さと配慮とをもって取扱ひ、珍しい、きゃしゃな、おそらくはあまりに早熟すぎる、おそらくは危険にさらされている兄弟として、心をくばった。

青年は院長のあらゆる命令と忠告と賞賛を、申しぶんない態度をもって受け入れ、けつして逆らったことがなく、ふきげんになったこともついぞなかった。彼に関する院長の判断が正しくて、彼の唯一の悪徳は傲慢だったとすれば、彼はこの悪徳をりっぱに隠すことを心得ていた。彼に對しては何も言うことはなかった。彼は完全で、すべてのものにまざっていた。ただ、学者を除いては、ほんとに彼の友になるものは少かった。ただ独特の高貴さが、冷却させる空気のように彼を包んでいた。

「ナルチス」と院長は一つのざんげののちに彼に言った。

「わたしは君に對しきびしい判断を下したという罪のあることを告白するよ。わたしはしばしば君を傲慢だと思つた。おそらくそれは不当だったろう。君は全くひとりだ、若い兄弟よ、君は孤独だ。贊嘆者を持つてはいるが、友を持つてはいない。君を時おり非難するきっかけがあったらと思つてはいたが、きっかけがない。あたりまえなら、君の年配の若い人たちが陥りやすいように、君も時々不法法になつてくれたらと思つたよ。君はついぞそうなつたことがない。わたしは時おり君のことが少し心配になるんだよ、ナルチス。」

若者は黒っぽい目を老人に向かつて開いた。

「院長先生、どうかご心配なさらないでください。私はいかにも傲慢であるかも知れませんが、先生、お願いです、その点は罰してください。時には自分を罰したいと思ひます。私を隠者の住まいに送ってください、あるいは私に卑しい勤めをさせてください。」

「どちらをするにしても君は若すぎる、兄弟よ。」と院長は言つた。「その上、君はことばと思索の能力を高度に持っている。君に卑しい勤めを課すことは、そういう神の恩恵を濫費することになるだろう。おそらく君は教師で兼ねて学者になるだろう。自分でそう願わないかい？」

「失礼ですが、先生、自分の願ひについてそんなにはつきりした分別は持つておりません。私はいつも學問を喜びとするでしょう。どうしてそれに変りがあるでしょう？」

かし、學問が自分の唯一の領域であろうとは思いません。ひとりの人間の運命や使命を決定するのは、必ずしも願望ではなくて、他の、予め定められたものであるかも知れません。」

院長は耳を傾け、真剣になった。しかし、老いた顔に微笑を浮べて、こう言った。「わたしが人間を知った範圍では、われわれは、特に若い時には、みな少し、神意と自分の願望とを混同しがちである。だが、君は自分の天職をあらかじめ知っているように思っているのだから、一言それについて言っておくれ。いったい、君はどういう天職を持っていると思うかね？」

ナルチスは黒っぽい目を半ば閉じたので、目は長い黒いまつげの下に隠れてしまった。彼は黙っていた。

「言いなさい、ナルチス。」と院長は長く待ったあとで言った。低い声で、目を伏せてナルチスは話しはじめた。

「私は何よりも修道院生活をするように定められていると思っています。修道僧になり、司祭になり、副院長になり、院長になるかも知れません。自分の願いだからといって、そう信じるわけではありません。私の願いは役職をめざしてはおりませんが、それを課せられるでしょう。」

長い間ふたりは黙っていた。

「なぜ君はそういうことを信じるのかい？」と院長はためらいながらたずねた。「学識を除いて、どういう特性が君にあって、その信念にあらわれてくるのかね？」

ナルチスはゆっくり答えた。「それは、自分自身についてばかりでなく、他の人々についても、人間の性質と天職を感知することができるといふ特性です。この特性が私を強いて、他の人々を支配することによって他の人々に仕えさせるのです。私は修道院生活をするように生れついていなかったら、判事が政治家にならなければならぬでしょう。」

「そうかも知れない。」と院長はうなずいた。「人間とその運命を知るといふ君の能力を実例によってためしてみたいか？」

「ためしてみました。」

「実例をあげる用意があるかい？」

「あります。」

「よろしい。兄弟たちの知らぬところで彼らの秘密に立ち入ることは好まないから、君は君の院長ダニエル、つまりわたしについて知っていると思うことを言ってくれるかい？」

ナルチスはまぶたをあげて、院長の目をのぞきこんだ。

「それはご命令ですか、院長先生？」

「わたしの命令だ。」

「言いにくいことです、先生。」

「君を強いてしゃべらすのは、わたしにもしにくいことだよ。だが、わたしはそうする。言いなさい！」

ナルチスは頭を垂れて、さやくように言った。「私が

先生について知っていることは、いくらかございませぬ。あなたは神のしもべであつて、ヤギの番をするか、隠者の住まいで鐘を鳴らしたり、百姓のさんげを聞いたりするほうが、大きな修道院を支配するより好ましいだらう、ということを私はぞんじています。あなたは聖母に特別の愛を抱いており、聖母に向かつて最も多くお祈りになることを、私はぞんじています。あなたは時々、この修道院で修められているギリシャその他の学問が、あなたにゆだねられたものたちの魂にとつて混乱と危険をもたらさぬようにと、お祈りなさい。また、グレゴル副院長に對しみずから寛容を失わぬようにと、時々お祈りなさい。また、穩かな往生をとげられるようにと、時々お祈りなさい。それが聞きとどけられて、穩かな往生をとげられることと、私は信じます。」

院長の小さい応接室の中は静かだった。やつと老人は言つた。

「君は夢想家で、幻を抱いている。」と老院長は打ちつけて言つた。「幻というものは、たとえ敬虔な、悪意のないものであつても、思ひがいをさすものだ。わたしがそういうものを信じないように、君も信じないようにしなさい。——夢想家なる兄弟よ、わたしがそのことについて心の中でどう考へているかわかるかい？」

「先生がたいそう好意をもつて考へていらつしやることは、わかります。先生はこんなふうに考へておられます。」

『この若い弟子は少し危険に陥っている。彼は幻を抱いている。おそらく冥想しすぎたのだらう。罪のつぐないを課してもいい。それが彼をそこねることはあるまい。だが、彼に課する罪のつぐないを、わし自身もになお。』——これがいま先生の考へていらつしやることです。」

院長は立ちあがつた。微笑しながら彼は見習い僧に、引きとるように目くばせした。

「よろしい。」と彼は言つた。「君の幻をあまり本氣に取らぬようにしなさい、若い兄弟よ。神は、幻を抱くことよりほかに、なおいろいろのことをわれわれから要求なさるのだ。君は老人にらくな死を約束することによつてお世辭を言つたでしょう。老人は一瞬その約束を喜んで聞いたでしょう。それでたくさんだ。君は、明日あさのミサのあとで珠数を一めぐり祈りなさい。つゝ、ましく心を打ちこんで祈るのです。お座なりにでなく。わしもする。さあ引きとりなさい、ナルチス、話は十分にした。」

また別な時、ダニエル院長は、教授をしているいちばん若い神父と、ナルチスとが、教案のある点について意見が一致しないため、仲裁しなければならなかつた。ナルチスは非常な熱意をもつて、ある種の変更を授業に加えるように迫り、なるほどとうなずかせるような根拠をあげてそれを正当づけることも心得ていた。ローレンツ神父はしかし、一種の嫉妬から、それに同意しようとしなかつた。改めて相談し合うごとに、気まずい沈黙と渋面の日がいく日

もつづいた。ナルチスはあくまで自説の正しいことを信じて、かさねてその件を取りあげた。とうとうローレンツ神父はいくらか感情を害して言った。

「いや、ナルチス、議論はやめにしよう。君も心得ている通り、決定する権利はわたしにあつて、君にはないのだ。」

君はわたしの同僚ではなくて、助手であつて、わたしに従わなければならぬ。しかし、この事がらに君にとつてきわめて重要であるらしいし、わたしが君にまざっているのは、職権の点であつて、知識や天分の点ではないから、わたし自身で決定を下さないことにして、院長にお話して、決定していただく。」

ふたりはそうした。ダニエル院長は文法の授業の解釈に關するふたりの學者の議論を、辛抱つよく、打ちとけて聞いた。ふたりがめいめいの意見を詳しく述べ、論証してしまつと、老人は陽氣にふたりを見つめ、しらが頭を少し振つて言った。「兄弟たちよ、君たちはふたりとも、わたしがこの事について君たちと同様に心得ている、とは思つていない。ナルチスが学校のことをそれほど心にかけて、教案を改善しようとするのは、感心だ。しかし、もし上長が別な意見だったら、ナルチスは黙つて従わなければならぬ。学校のどんな改善も、そのためこの家の中の秩序と従順とが乱されるならば、それをつぐなうに足りないだろう。ナルチスが謙歩することを心得ないのを、わたしはとがめる。君たちふたりの若い學者のためにわたしは、君た

ちより愚鈍な上長がいつも君たちの上にいてほしいと思う。高慢に対してはそれよりよい薬はないのだ。」こういう氣のよい冗談で院長はふたりを去らせた。しかし彼はその後数日間、ふたりの教師の間がまたむつまじく行つていくかどうか、注目することを忘れなかった。

さて、たくさんの顔が来たり去つたりするのを見ている修道院に、新しい顔が一つあらわれた。この新しい顔は、注意もされずすぐに忘れられてしまふ顔とはちがつていた。

もうずっと前に父親から申しこまれていた少年で、修道院内の学校で勉強するために、ある春の日、到着したのだつた。少年と父親は例のクリの木に馬をつないだ。表門から門番が迎えに出た。

少年は、まだ冬枯れの木を見あげ、「こんな木は見たことがない。みごとな珍しい木だ！ なんとという名か知りたいいもんだ。」と言つた。

苦勞性のいくらかしかめつづらをした、年かさの父親は、子どものことを氣にとめなかつたが、門番はすぐ少年が氣に入つて、木の名を教えてやつた、少年はしたしげに感謝し、手を出して言つた。「ほくはゴルトムントと言ひ、こゝの学校に入れられるんです。」門番は打ちとけては、えみかけ、新來者の先に立つて表門を通り、幅の広い石の階段をあがつて行つた。ゴルトムントはひるまずに修道院に足をふみ入れた。こゝではもう、二つのもの、あの

木と門番とに会って、友だちになれたぞ、という氣持を抱いて。

ふたりはまず、校長をつとめている神父に、そして夕方にはしたしく院長にも面会した。その二個所で、帝国官吏である父は、むす子のゴルトムントを紹介した。彼はお客としてしばらく滞在するようす、められた。しかし彼はひと晩だけお客としてのものを受けるとし、あすは帰途につかねばならないと言った。彼の二頭の馬のうち一頭を修道院に贈り物にしたいと申し出た。それは受納された。僧職にある人たちとの談話は終始丁寧に冷やかに行われた。院長も神父も、かしこまって黙っているゴルトムントを喜ばしげに見つめた。人なつこい美少年はすぐにふたりの氣に入った。彼らは父親を翌日未練なく旅立たせながら、むす子喜んで引き取った。ゴルトムントは先生たちに紹介され、生徒の広い寝室にベッドをあてがわれた。改まって、悲しげな顔で、彼は、馬で去って行く父にいとまを告げ、立ったまゝ、父が修道院の外の庭の狭いアーチ型の門を通って、穀物倉と水車小屋の間に消えるまで、見おくった。向きなおった時、彼の長いブロンドのまつ毛には、一滴の涙がやどっていた。その時、早くも門番が愛撫するように肩をたゝいて、彼を迎えた。

「ねえ、悲しがるんじゃないよ。」と彼は慰めるように言った。「たいいていの人は初めのうち、ちよっとおとうさんや、おかあさんや、兄弟を恋しがるもんだ。でも、すぐ

に、こゝだつてけつこう楽しく暮せることがわかるよ。」
「ありがとう、門番さん。」と少年は言った。「ほくには兄弟も母もないんです。父だけです。」

「その代り、こゝには、友だちや學問や音楽や、あんたがまだ知らない新しい遊戲だつてある。何やかやと、すぐなじみになるよ。打ちとけた人がほしかったら、わしのところに来なさい。」

ゴルトムントはほゝえみかけた。「ほんとにありがとう。ほくを喜ばしてくれようと思ふんなら、父の残して行つた馬をすぐ見せてください。ことばをかけてやって、やつぱり元氣でいるかどうか見たいんです。」

門番はさつそく彼をつれて、穀物倉のそばの馬小屋に行つた。なまあたゝかい薄くらがりの中で、馬や、ふんや、大麦のにおいが強くした。仕切の一つの中に、彼をこゝにのせて来たクリ毛の馬が立っているのを、ゴルトムントは見つけた。早くも彼に気づいて頭を長くさしのばしている馬の首を、彼は両手で抱いて、白いぶちのある広いひたいにはおを押しつけ、愛情こめてさすりながら、その耳にささやいた。「プレス、今日は、ほくのけなげなプレス、元氣かい？ お前はまだほくを思っているかい？ たべるものもあるかい？ お前のうちのことも考えるかい？ プレスや、かわいゝやつ、お前が残ってくれたのは、ほんとにありがたいよ、時々お前のところに様子を見にやつて来るよ。」彼はそでの折返しの中から、のけておいだ朝食のバ

ンを一きれ引き出し、小さく碎いて、馬に食わせた。それから彼は別れを告げ、門番について中庭を横ぎった。大きな町の市場のように広く、一部分ボダイ樹が植わっていた。内の入口で門番にお礼を言い、握手した。その時、彼は、きのう教えられた教室への道をもう忘れていたことに気づき、苦笑し、赤くなり、門番に案内をたのんだ。門番は快く案内してくれた。それから彼は教室にはいった。十人あまりの少年と青年がベンチにこしかけていた。助教師のナルチスは振り向いた。

「ぼくは新入生のゴルトムントです。」と彼は言った。

ナルチスは、微笑もせず、ちよつと会釈して、うしろのベンチに席を指定し、すぐに授業をつづけた。

ゴルトムントはこしをおろした。自分より数年しか年長でないひどく若い先生を見て、驚いた。この若い先生がたいそう美しく上品で真剣で、しかも人ずきがして親切なのを見て、驚き、心から喜んだ。門番は彼に愛想がよく、院長はたいそう打ちとけた態度をとってくれた。あちらの馬小屋には、故郷のかたみであるプレスがいた。今はこゝに、学者のように真剣で、王子のように上品な、驚くほど若い先生がいた。自制した冷静な、きびきびした信服さす声だった！ 何の話をしているか、すぐには理解できなかったが、感謝をこめて彼は傾聴した。彼は快い気持だった。親切な良い人たちのところにやって来たのだ。この人たちを愛し、その親交を求める心の用意ができていた。朝ベッド

の中で目ざめた時は、窮屈な感じがした。長い旅にまだ疲れてもいた。父から別れた時は、少し泣いてしまった。だが、今はもうよくなっていた。彼は満足していた。長い間、くりかえし、彼は若い先生を見つめた。きりつとした、しなやかな姿、冷たくきらめく目、はつきりと、しつかり綴りを形づくる、ひきしまった口などを見、空をかけるような疲れを知らぬ声を聞いて、彼は楽しんだ。

しかし授業時間が終つて、生徒たちがそうぞうしく立ちあがつた時、ゴルトムントはびっくりして起きあがり、長いこと眠っていたのに気づいて、少し恥ずかしくなった。自分でそれに気づいたばかりでなく、同席のものたちもそれを見ており、さゝやいて仲まに知らしめていた。若い先生が教室を去ると、生徒たちは八方からゴルトムントを引っぱったり突ついたりした。

「寝たりたかい？」とひとりगतすね、齒をむき出して笑った。

「あつばれた生徒だ！」とひとりはあざけた。「こいつは偉い名僧知識になるぞ。最初の時間からさつそく船をこぐんだからな！」

「この赤ちゃんをベッドに運んでやれ。」とひとりが言い出すと、みんなは彼の腕や足をつかんで、わいわい言いながらかついで行こうとした。

ゴルトムントはひどく驚くと同時に腹が立った。彼はめくら打ちに打って自由になろうとしたが、いくつもびしゃ

つと張られた上、とうとうゆかに落された。ひとりだけがまだ彼の片足をしっかりとつかまえていた。彼はそれを強引にけとばしてふり切ると、身がまえていた手あたり次第のやつに飛びかゝった。たちまちそいつとの激しい格闘に巻きこまれた。彼の相手は強いやつだった。みんなはこの一騎打ちを熱狂してながめた。ゴルトムントが負けないで、強いやつにげんこをいくつか食らわした時、彼は名まえこそまだ全然知らなかったが、生徒の中にもう身かたができていた。だが突然、みんなあたふたと散りじりに逃げてしまった。みんながいなくなると、ほとんど同時に校長のマルティン神父がはいって来て、ひとり残っていた少年の前に立った。驚いて校長は少年を見つめた。少年の青い目が、まっかになった。ふたれて少しはれた顔の中から、どぎまぎして見えていた。

「おや、いったいどうしたのだ？」と彼はたずねた。「お前はゴルトムントだったね？ のらくらものたちが何かしたのかい？」

「いゝえ、いゝえ」と少年は言った。「ぼくが彼をやつつけたんです。」

「わかりません。ぼくはまだだれも知りません。だれかひとりがぼくと取っ組み合ったのです。」

「そうか。彼が手を出したのかい？」

「わかりません。いゝえ、ぼくのほうが手を出したんだと

思います。みんながぼくをからかったので、ぼくはおこったんです。」

「そりゃ、出だしはなかなかいい。ところで、もう一度この教室でひどいなり合いをやったら、罰だよ。さあ、お八つに行きなさい、さあさあ！」

ゴルトムントが恥じ入って駆け出し、くしゃくしゃになった明るい金髪を歩きながら指でせつせとくしけずっているのを、見おくりながら校長は微笑した。

ゴルトムント自身、この修道院生活の最初の行いは全く不作法で血まよっていたと考えた。かなり悔恨を感じながら、彼は仲まをさがし、お八つのパンをたべているのを見つけた。だが、彼は尊敬と好意とをもって迎えられ、けんかの相手と男らしく仲なおりし、この時から仲まの間に快く迎えられたのを感じた。

第二章

そのうち彼はみんなと仲よしになったけれど、ほんとの友だちはそうすぐには見つからなかった。同級生の中に、特に身ぢかに、あるいは心をひかれるように感じたものはなかった。彼らはしかし、この果敢な拳闘家愛すべき乱暴ものと思いがちだったのに、彼がむしろ模範生の名を勝ち得ようとしているらしい、きわめておとなしい同級生で

あることを知って、意外に思った。

ゴルトムントが心を引かれ、好きだと思い、絶えず念頭に置き、賛美と愛と畏敬とを感じている人物が、修道院にふたりいた。ダニエル院長と助教師ナルチスとだった。彼は院長を聖者と考えがちであった。その純真さと親切、その澄んだ思いやりのあるまなざし、命令と支配とをつゝましく奉仕として実行する態度、やさしい静かな挙措など、すべてが彼を力よく引きつけた。できることなら、この敬虔な人の個人的な召使になリたかった。いつもこの人のそばにいて、言いつけに従い、奉仕したかった。心服と献身への少年らしい切望をあげて、不断のいけにえとしてさげたかった。そして清い高貴な聖者らしい生活をこの人から学びたかった。なぜならゴルトムントは修道院の学校を卒業するばかりでなく、できれば、完全にいつまでも修道院にとどまり、一生を神にさへげるつもりでいたからである。それは彼の意志であつたし、父の願いと言いつけでもあつた。またおそらく神自身の定めであり、要求であつた。美しい輝かしい少年を見て、そう思うものはなかったらしいが、ある負い目が彼の上にのしかゝつていた。素姓の負い目、つぐないといけにえへの隠れた天命が彼の上にのしかゝつていた。院長もそれには気づかなかつた。ゴルトムントの父は院長に多少暗示的なことを言い、むす子はいつまでも修道院におきたいという願いをはつきり述べはしたが。——何か隠れた汚点がゴルトムントの生れにはく

つついているように、何か秘密にされていることがつぐないを求めているように、思われた。だが、あの父親は院長にあまり気に入らなかつた。院長は、父親のことばと、いくらか大げさに振舞う態度全体に、いんぎんな冷淡さで応対し、そのほめかしに大した意味を認めなかつた。

ゴルトムントの愛を目ざしたもひとりの人は、より鋭く見、より多く感づいていたが、控へ目に構えていた。ナルチスは、どんな愛らしい金の鳥が飛びこんで来たかを、十分気づいていた。その高貴さのために孤立していた彼はすぐ、ゴルトムントはあらゆる点で彼の反対であるように見えたにかゝわらず、自分の近親者であることをかぎつけた。ナルチスは暗くやせていたのに、ゴルトムントは輝くように花やかだった。ナルチスは思索家で分析家だったのに、ゴルトムントは夢想家で、童心の持ち主であるように見えた。しかし、これらの対立をおゝいつなく共通点があつた。ふたりとも、高貴な人間であつた。ふたりとも、あらゆる天分と特徴によつて他の人よりきわだつていた。ふたりとも、運命から特別の戒めを授かつていた。

ナルチスはまもなくこの若い魂の性質と運命とを見ぬいて、燃えるような関心を寄せた。ゴルトムントは、美しい、すぐれて聡明な先生を、熱烈に賛嘆した。しかしゴルトムントは内気だった。彼は、注意ぶかい覚えのよい生徒であるように、へとへとになるまで努力するよりほかに、ナルチスの愛を求める方法を知らなかつた。だが、彼をしりこ